

# 民族藝術学会

## 第36回大会案内

会期：2020年7月25日(土)、7月26日(日)

主催：民族藝術学会

会場：オンライン開催(当番校：大阪大学)

プログラム：

7 月 25 日 (土)	10:30	開会あいさつ	会長
	10:35~12:15	一般発表	
	10:35~11:05	カトマンズ・クマリの館についての一考察	城 直子(建築)
	11:10~11:40	タンザニアにおけるティンガティンガ・アートの多様化 —アーティストから見た真正性に着目して—	大川 和愛(民族学)
	11:45~12:15	プレ・アンコール～アンコール期浮彫の“鳳首篋篋”が意味すること	由比 邦子(芸術史)
	12:15~13:30	休憩(75分)	
	13:30~	一般発表	
	13:30~14:00	中村裕太は長谷川三郎に何を見たのか —《眼横鼻直》と蒲鉾板版木を中心に	服部 正(美術) / 中村 裕太(工芸)
	14:05~14:35	1950年代関西における前衛書と美術の交流：森田子龍の創造と摩擦	向井 晃子(美術史)
	14:40~15:10	在朝鮮日本人画家・加藤松林人の戦後作品 —詩人・金素雲との関係を中心に—	バン ミナ(美術)
15:15~15:45	画家葉祥明のコスモロジー：家族誌のアプローチから	張 玉玲(民族学)	
16:00	オンライン懇親会 (ご案内するリンクより参加ください。もとより無料です)		

7 月 26 日 (日)	13:00~14:40	一般発表	
	13:00~13:30	アートと人類学：往還の先に見える可能性	廣田 緑(美術) / 中尾 世治(民族学)
	13:35~14:05	遠い「他者」の記録をひらき継承する技法の探求 —「映像のフィールドワーク展」の試みから	丹羽 朋子(民族学)
	14:10~14:40	裏側からグローバリゼーションを描くこと —中南米と東南アジアの集団的芸術実践を事例に—	江上 賢一郎(美術)
	14:40~15:00	休憩(20分)	
	15:00~17:30	シンポジウム「2010年代のポップフォーク(東欧演歌)」	
	15:00~15:15	趣旨説明	伊東信宏(音楽学)
	15:15~15:50	報告1「音楽における地域主義：南東欧のポップフォーク」	イヴァ・ネニッチ (音楽学・ペオグラード大学)
	15:50~16:00	休憩	
	16:00~16:25	報告2「表層的音楽—ルーマニアのマネレがつなぐ世界」	岩谷彩子(人類学)
16:25~16:50	報告3「ポピュラー音楽と「民族性」 ：セルビアにおけるターボフォークの言説と実態」	上畑史(音楽学)	
16:50~17:00	休憩		
17:00~17:30	全体討議		
		閉会の辞	大会実行委員長

■ 一般発表 7月25日(土) 午前

10:35～11:05 カトマンズ・クマリの館についての一考察  
城直子(建築)

世界遺産カトマンズ盆地の三都、カトマンズ・パタン・バクタプルは中世(15世紀)に三都マツラ王国として建築・美術工芸が隆盛を極めた。三都はそれぞれ王宮をもち、現在も王宮前広場とともに往時の趣をとどめている。

カトマンズ盆地の建築について特筆すべき点のひとつは、チョーク(cok)という中庭建築の存在である。チョークは建物に囲まれた口の字型の中庭のことで、王宮・寺院・住居など至る所でチョークがみられる。そしてチョーク建築は仏教僧院バハ(baha)との類似が指摘されている。

本発表では「クマリ・バハ」、「クマリ・チョーク」と呼ばれるカトマンズ・クマリの館について考察を展開してみたい。クマリ(kumari)はカトマンズ盆地に今でも存在する少女の生き神様である。その住まいクマリの館は、1757年ジャヤプラーカーシュ・マツラ王が造営した。マツラ王朝とクマリ、王権と女神崇拜が交錯する器としての視点から、チョークと仏教僧院の謎をひも解く一助としたい。

11:10～11:40 タンザニアにおけるティンガティンガ・アートの多様化：アーティストから見た真正性に着目して  
大川和愛(民族学)

アフリカ芸術は、これまで西洋との不均衡の中で様々な問題を抱えてきた。多くの芸術は西洋人から「芸術作品」とは見なされず、作品の価値を決める鑑定にアーティストの視点が反映されることは多くはなかった。本発表で取り上げるティンガティンガ・アートとは、タンザニア人の創始者 E.S.ティンガティンガの描いた絵画、また彼から受け継がれた絵画スタイルのことである。作品は、色彩鮮やかで、エナメルペンキを使用し、タンザニアの自然や動物、生活を描く特徴を持つと言われているが、実際には使用する画材や使用色、モチーフなどの点でこのアートは多様化している。どのようにして作品が多様化し、またなぜ多様な作品が「オリジナル」なティンガティンガ・アートとして認識されるのか。本研究は、多様化するティンガティンガ・アートの真正性、現地の人々の言葉に従うと「オリジナル」であることについて、アーティストの視点から検討することを目的とする。

11:45～12:15 プレ・アンコール～アンコール期浮彫の“鳳首箜篌”が意味すること  
由比邦子(芸術史)

“鳳首箜篌”はインド起源の弓形ハープに対する中国での呼称で、恐らく仏教との関わりでインドからシルクロード経由で中国に到来したのであろう。しかしインドに残る弓形ハープ図像の中に鳳首箜篌の事例は見られない。また中国では鳳首箜篌は唐代十部伎の中で唯一天竺伎の楽器と規定されているが、信頼できる図像資料はない。

一方、『新唐書』に見られる驃国(ピュー)の鳳首箜篌についての記述や浮彫図像としての弓形ハープが豊富に残るのが東南アジアである。特にプレ・アンコール～アンコール期の弓形ハープは生き生きとしたスタイルで舞踊伴奏を行なっている。そしてその中に鳳首箜篌の事例が見られるのである。したがって唐代で天竺伎のものとした鳳首箜篌は仏教の脈絡とは別に、東南アジアから娯楽音楽として中国に到来した可能性も考えられるのである。

そして鳳首箜篌は弓形ハープの別称ではなく、あくまで弓形ハープのタイプと認識する必要がある。

■ 一般発表 7月25日(土) 午後

13:30～14:00 中村裕太は長谷川三郎に何を見たのか：《眼横鼻直》と蒲鉾板版木を中心に  
服部正(美術史)、中村裕太(美術家)

美術家の中村裕太は、2019年12月に芦屋市立美術博物館で開催されたグループ展「in number, new world / 四海の数」に参加した。4人の現代美術家の作品と美術博物館の所蔵品を通じて「数」について考えるこの展覧会で、中村は抽象絵画のパイオニアとして知られる長谷川三郎の書作品《眼横鼻直》(1956年頃)に注目した。この作品を起点として、中村の探究は長谷川の蒲鉾板による版画(1951～53年頃)へと向かい、自身のインスタレーション作品へと展開していった。

中村はなぜ、長谷川の画業において余技とも見える書作品に注目したのだろうか。書と版画にどのような関連を見出したのだろうか。インスタレーションの冒頭と掉尾で、中村が謎解きのように提示した「かまぼこを抽象する」という文字と古いタイル片は何を意味するのだろうか。

長谷川三郎の画業に新しい光を当てた中村のインスタレーションを作者とともに考察し、展示に含まれる様々な要素を一本の糸に紡いでいく。

14:05～14:35 1950年代関西における前衛書と美術の交流：森田子龍の創造と摩擦  
向井晃子(美術史)

明治政府が欧米の美術を基準に為した「書画分離」の政策により、書は日本の美術制度から周縁化された。書の美術制度からの周縁化は、漢字文化圏の中でも日本独自の状況で、欧米の美術に影響を受けた異文化の一様態と言えよう。本発表は、1950年代関西で開催された現代美術懇談会や雑誌『墨美』、『墨人』で行われた前衛書と美術の交流で、明治期の書と絵画の分類が、実践者達によって問い直されていたことを検証する。特に、雑誌『墨美』を創刊してその端緒を拓いた前衛書家の森田子龍に注目したい。従来、森田が1969年に抽象絵画を痛烈に批判して美術と決別した影響もあり、両者の交流には否定的な印象が持たれがちであった。しかし、1950年代前半の現代美術懇談会では、書やいけばなといった伝統芸術をも含めた多ジャンルの豊かな交流があり、その発起人の一人で後に具体美術協会を設立した吉原治良と森田は互いを評価していたのである。

14:40～15:10 在朝鮮日本人画家・加藤松林人の戦後作品：詩人・金素雲との関係を中心に  
バン・ミナ(美術)

加藤松林人(1898-1983)は、1917年に「朝鮮」に移住し、朝鮮美術展覧会を中心に植民地朝鮮画壇で約25年間活発に活動した在朝鮮日本人画家である。敗戦とともに日本に引き上げとなった加藤は、1950年頃から画業を再開するが、多くの在朝鮮日本人画家が履歴から「朝鮮」を消そうとしていたことと違って、戦後にも引き続き「朝鮮」関連作品を制作し続けた。今回の発表では、今まで具体的に取り上げられてこなかった加藤の戦後の作品について阿南市所蔵品を中心に紹介し、とりわけ画賛形式作品に注目する。加藤が画賛形式作品で引用している文学作品は、詩人・金素雲(1907-1981)が日本語に訳した朝鮮文学作品である。加藤は、金素雲の1972年版『朝鮮民謡選』『朝鮮童謡選』のカット画を担当するなど、二人は戦後の作品にお互いを取り入れている。加藤にとって金素雲は単なる引用作品以上の意味があり、加藤の戦後の作品制作全般に影響を与えた可能性について考察する。

15:15～15:45 画家葉祥明のコスモロジー：家族誌のアプローチから  
張 玉玲(民族学)

本報告は、中国福建省にルーツを持ち熊本出身の画家葉祥明に着目し、彼が抱く宇宙(世界)観及びそれが反映される作品について、彼が生まれ育った家庭的、社会的環境と結びつけながら分析し、考察するものである。具体的には、葉一族の移住・定住及び葉祥明の生い立ちをライフストーリーの形で整理し、彼に影響を及ぼすと思われる終戦前後の日本と世界の動きと関連付けて作品を分析していく。

中華文化を継承するか否かで華人性を規定するというこれまでの華人研究では、コスモポリタンのような生き方をしてきた葉祥明は、「見落とされてきた存在」だといえる。しかし一方、彼の作品は、彼の歩んできた人生を抜きにして語ることもできない。この意味においては、葉祥明を華人出身画家として位置づけ、家族誌というアプローチから画家とその作品について考察する本研究は、一つの新たな試みである。

■ 一般発表 7月26日(日) 午後

13:00～13:30 アートと人類学：往還の先に見える可能性  
廣田緑(美術)、中尾世治(人類学)

本発表は、アートと人類学の類似性がどこにあり、アートと人類学の往還から何がみえてくるのか、という問いに迫る暫定的アイデアの提示を目的としている。まず、制作過程に人類学との類似性が認められるアーティストの事例として下道基行と廣田緑をとりあげ、その類似性から想起できる人類学の可能性を考察する。すなわち、人類学の調査手法それ自体のアート化、人類学的な調査結果のアウトプットのアート化、および人類学的な調査手法の拡張と手法自体の意味の付与である。

次に具体的な事例として、アートと人類学を往来するユニット「トランスフェリムス」の「研究⇄作品」《トライアル003》を取り上げる。考古学では一般的な手法である実測図をアート化する過程を詳細に追うことで、「アートではないもの/アートのなるものをアートにする」という行為を分析し、これまで、十分に論じられてこなかった審美的な感性を明らかにしうる可能性を示した。

13:35～14:05 遠い「他者」の記録をひらき継承する技法の探求：「映像のフィールドワーク展」の試みから  
丹羽朋子(民族学)

本発表では、発表者が数年来、日本のアーティストや学芸員、多様な参加者と協働する、民族学映像の活用実践を考察する。これは1950-80年代にドイツで構築された学術映像アーカイブ「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ」を対象に、「観る、やってみる、問い続ける」を指針として、参加者が複数地域の映像を過剰な説明を介さず「観察」し、写された物作りや芸能等の身振り、或いは実際に使われた自然素材や道具等に自らの身体を応答させながら、被写体の生の営みを「なぞる」行為を通じて、より深い理解や気づきを体験するワークショップ形式の活動である。発表では、その発展形として昨年開催した「映像のフィールドワーク展」を中心に、近年国内外で活性化する芸術と人類学の協働実践や、地域・災害等の記録映像アーカイブの活用例等もふまえ、「他者」の／による記録をより広い時空間へとひらき継承する取組の可能性や問題等について考えたい。

14:10～14:40 裏側からグローバリゼーションを描くこと：中南米と東南アジアの集团的芸術実践を事例に  
江上賢一郎(美術)

グローバルアートは、アート・マーケットのグローバル化だけでなく、資本主義ヘゲモニーと同じロジックで芸術的実践また文化労働の領域を再編成し、不安定性を内包する「統合的システム」(Sholette 2019)として駆動している。一方では、2000年代以降のオルター・グローバリゼーション運動の展開と平行しつつ、各地域でのローカルな抵抗と文化実践、そしてそのトランスナショナルなネットワーク化が生まれきた。北米のアクティビスト・アート集団「Beehive Design Collective」の巨大絵画プロジェクトは、中央アメリカにおけるグローバリゼーションに対する先住民コミュニティの抵抗と自律の物語を描く民族誌的絵画を集団制作している。また、東南アジアにおける版画運動「タリン・パディ(インドネシア)」、「パンクロック・スラップ(マレーシア)」は開発に対する民衆の抵抗を描いているが、2010年以降その技法や表現をアジア各地のアクティビスト集団と共有するネットワークが生まれている。発表では、資本やマーケットに組織化されたアートワールドの文脈から逸脱しつつ、独自のトランスナショナルな文化連帯を作り出すもう一つのグローバルアートの潮流について報告する。

## ■ シンポジウム「2010年代のポップフォーク(東欧演歌)」

7月26日(日) 午後

15:00～15:15 趣旨説明

伊東信宏(音楽学)

1989年の体制転換後の東欧で同時多発的に発生した民俗的大衆音楽(筆者の命名では「東欧演歌」、一般には「ポップフォーク」と総称される)については『民族藝術』『arts/』誌上でも何度か報告したが、ここには今回のシンポジウムはその議論を振り返り、最近の新展開も含めて論じる。「東欧演歌」の核になるのはセルビアの「ターボフォーク」、ブルガリアの「チャルガ」、ルーマニアの「マネレ」といったジャンルである。これらの音楽には、当時東欧各国が体験しつつあった社会主義から自由経済へという現代最大の社会変革が見事に映し出され、高価な車ときらびやかな宝石、最新のモードと奔放な性が歌われながら、その一方でそんな新しい生活への戸惑いや疑いも同時に表明される。音楽はオリエントとオクシデントの間で揺れ動き、新たに流入した欧米のポップミュージックが模倣される一方で、ただのイミテーションでは済まずに突如「オリエンタル」な響きが噴出する。

バルカン諸国のポップフォーク研究の旗手であるイヴァ・ネニッチ博士、ロマの人類学的研究で注目を集めている岩谷彩子さん、そしてセルビアのポップフォークに関する論文で博士学位論文を提出したばかりの上畑史さんという三氏の報告をもとに、「民俗／民族」と「芸能／芸術」が交差する現象について考える。

15:15～15:50 報告1 音楽における地域主義：南東欧のポップフォーク

イヴァ・ネニッチ(音楽学・ベオグラード芸術大学)

ポップフォークの人气が各地で高まるにつれて、「西洋」(ポップ)と「東洋」(トルコ風)と「地域的」(セルビア的、バルカンの)という三角形には新しい要素がもたらされ始めている。ある種の地域主義(リージョナリズム)の感覚が、かつての「民族主義」の言説とは対抗するものとなり始めているのである。本報告では、ブルガリアの「チャルガ」のスターであるアンドレアによる「ハイデ・オパ」と、そのセルビア版であるミリツァ・パヴロヴィチによる「タンゴ(オパ・オパ)」を例として、現代のバルカンのポップフォーク・シーンで、通文化的な交流がどのように機能し、さらに様々なカバー・バージョンがどのように「民俗的」ないし「ポップ的」な音楽要素を選別するかを示す。(この報告は英語で行われます。抄訳付き)

16:00～16:25 報告2 表層的音楽：ルーマニアのマネレがつなぐ世界

岩谷彩子(人類学)

本報告では、ルーマニアのマネレ(manele)という(アン)ポピュラー音楽に着目し、マネレがポスト共産主義の不安定な社会状況を生きる人々をつなぐ役割を果たしてきた状況について明らかにする。エスニック・マイノリティであるロマが従事するマネレは、非ロマとロマ、ルーマニアと周辺諸国との境界をたえず組み替えながらルーマニアの現在を照らし出してきた。マネレが「表層的」であるからこそ可能となっている、変化に対する即応性にも言及しながら考察してみたい。

16:25～16:50 報告3 ポピュラー音楽と「民族性」：セルビアにおけるターボフォークの言説と実態  
上畑史(音楽学)

1990年代以降のセルビアでメインストリームのポピュラー音楽となったターボフォーク。その一方で、知識層からは批判され続け、同国の人々の「民族性」に関わる問題として、セルビア社会で論争を引き起こしてきた。その背景には、オスマン帝国による支配の歴史やバルカン半島の多文化的風土、また20世紀に入り再編される民族文化の在り方などが複雑に絡んでいる。本発表では、こうした背景を参照しながらターボフォークを巡る言説と同音楽・文化の実態とを比較・分析することによって、ターボフォークと結びついた民族的アイデンティティおよび同音楽の文化的意義を考察し報告する。